

佳作

夢の国

東京都 東海大学菅生高等学校二年 齊藤花

私が今まで十七年間生きてきて感動したことは、ディズニーのキャストさんについてです。キャストさんにはたくさん感動をもらいました。その中でも特に感動した二つの話を紹介します。

私が小学校一年生の春休みに、家族でディズニールランドに遊びに行ったときの話です。私が父とシンデレラ城の前あたりで遊んでいたら私が転んでしまい、首からさげていたポップコーンケースを落としてしまい、ポップコーンが地面に散らかってしまっただけです。するとすぐに、キャストディアルさんという清掃員さんが私のそばにかけ寄り

「大丈夫？ けがはない？」

と聞いてきました。でも私は傷の痛みよりも、ポップコーンを落としてしまったショックで大泣きしました。するとキャストディアルさんはポケットからカードのような物を取り出し

「はい、これあげる。魔法のカードよ。ティンカーベル

が魔法をかけてくれるの。このカードをポップコーンのお姉さんに渡してごらん。今こぼしちゃったポップコーンが元通りになるから。」

と私に差し出しました。私はカードを受けとり、父とポップコーン売り場へ行きました。ポップコーン売り場のキャストさんは、バケツに山盛りに入れてくれました。それからさっき自分がポップコーンをこぼした場所へ戻ると地面に落ちていたポップコーンが無くなっていました。私は、ポップコーンはどこへ行ったのとキャストディアルさんに聞きました。するとキャストディアルさんは

「言ったでしょう？ ティンカーベルの魔法で元通りになるって。」

と言いました。今高校二年になって思い返してみると、ディズニーのサービス精神ってすごいなと思います。

これは私が中学二年のときに読んだある本の中に入っていた一つの話です。

「サイン帳の落とし物はないですか？」

インフォメーションセンターに一人のお父さんが元氣なく入ってきました。落としたサイン帳の中身を聞くと、息子さんがミッキーやミニーに一生懸命に集めたサインがあともう少しでサイン帳一杯になるところだったそうです。でもインフォメーションセンターにはサイン帳は届けられていませんでした。キャストはサイン帳の特徴

を聞き、あちこちのキャストに連絡を取りました。しかし、見かけたキャストは誰一人いませんでした。キャストはお父さんにいつまで滞在しているか尋ねたところ、二日後のお昼には帰らなければいけないとのこと。

「手分けして探しますので二日後、お帰りになる前にもう一度インフォメーションセンターに立ち寄っていただけですか。」

と笑顔で声をかけました。そして、お父さんが帰った後も色々な部署に電話をかけてみたり、自分の足で探しても行っただけです。ところが、どうしても見つけないことができず、二日後を迎えてしまいました。

「見つけることができませんでした。代わりにこちらのサイン帳をお持ちください。」

それは、落としたサイン帳と全く同じサイン帳を自分で買って、いろいろな部署を回って全てのキャラクターのサインを書いてもらったものを手渡したのです。お父さんはビックリした様子でした。後日、お父さんからデイズニーランドに一通の手紙が届きました。「先日はサイン帳の件、ありがとうございます。実は連れていた息子は脳腫瘍でいつ死んでしまうか分からない、そんな状態のときでした。息子は『デイズニーランド行こうね』と毎日のように言っていました。どうしても息子をデイズニーランドに連れて行ってあげたいと思い、命があと数日で終わってしまうかもしれないときに、息子をデイズ

ズニーランドへ連れていきました。ご用意いただいたサイン帳を息子に渡すと大喜びしました。息子は死ぬ直前までサイン帳を眺めて胸に抱いたまま息を引き取りました。もしあなたがあの時、あのサイン帳を用意してくださらなかったら、息子はこんなにも安らかな眠りにつけていなかったと思います。本当にありがとうございます。」手紙を読んだキャストはその場で泣き崩れました。

もちろん、その男の子が亡くなった悲しみもあったと思いますが、あの時精一杯のことをしておいて、本当に良かったという安堵の涙だったと思います。ほかに、デイズニーからはいつもたくさんの感動ももらっています。もちろん感動だけでなく、夢や希望も与えてくれる、そんなデイズニーが私は大好きです。